

仰げば尊し…

教授・副センター長 昌子 佳広

教育学部では教育実習事前指導科目として「教育実地研究入門Ⅰ」・「(同)Ⅱ」があり、「Ⅰ」は1年次で、「Ⅱ」は2年次で行う。これらの授業運営は当センターが担当していて、それぞれの内容は本活動報告書の該当ページに説明している通りである。特に「Ⅰ」で夏休み期間中の課題にしている「恩師へのインタビュー」は、できれば教育学部以外の学部における教育実習事前指導でも同じように学生への課題にしたいと考えているが、今のところそれを課すタイミングなどが難しく、実現に至っていない。

そもそもこの課題は、ある書籍から着想を得たものである。その書籍とは『過去と記憶の“リ・メイキング”―学校時代の「事件」に出会いなおす方法』(府川源一郎編, 1998年, 太郎次郎社)というもので、編者は某大学の教員であり、教職課程に位置付く担当授業科目の中で学生に課したレポートを基に編まれたものだ。詳しい内容は割愛するが、これと同じことを私自身もやってみたいと思い、かつて教育学部で担当していた専門科目で授業の中心的な課題・内容・活動として実施していた。「教育実地研究入門Ⅰ」での課題は、言わばその縮小版である。

かつて教育学部で実施した科目(「総合演習」といった)では、簡単に言うと、自分が小学生・中学生であった頃に体験した事柄の中で強く印象に残っているできごとを文章にまとめ、それを、そのできごとに直接・間接に関わっていた当時の先生に読んでもらい、コメントをもらって、自分自身さらに考えたことを加え、レポートにまとめるということを中心的な課題とした。学生たちにこの課題を提示する前に、活動およびレポートのモデルとして示すために、私自身も、中学生時代の担任の先生に連絡し、直接会うことは時間的・距離的に難しかったので文章を郵送し、返信をもらった。モデルというより、学生たちに取り組みせる活動のシミュレーションを自分自身でやってみよう、というのが当初の目的であったが、結果的には、それは単なるシミュレーションとか、学生のモデルとかいうレベルにとどまるものではなく、自分自身にとって忘れがたい貴重な経験となった。そのとき先生から送られてきた返信の文書は今でも(あれから既に15年が経っている)大切に保管している。そもそも先生に電話をしたとき、私が中学生当時30代半ばであった先生はある中学校の校長先生になっておられたが、20年以上をえているのに私のことをよく覚えていてくださり、私の部活動のことや自宅の様子など記憶にあることを細かく話してくださった。単純に感激した。そして、私の送った文章(その内容は紙幅の都合もあるのでここには書かない)に対して、当時の先生ご自身の思いを詳しく書き綴っていただいた。具体的に紹介できないのがもどかしいが、その内容を通じて先生の「教師魂」に触れた気がした。その先生の「教師魂」を、私が受け継いでいかなければ、と思った。

「教育実地研究入門Ⅰ」での学生のレポートを読むのは本当に楽しい。教職課程で学ぶ学生にとって、かつての恩師はその“原点”あるいは“出発点”なのだ。学生自身もそうだろうが、私も“原点”に還ったような気持ちになる。

「仰げば尊し我が師の恩」。今や滅多に歌われることがなくなったようだが、教職課程に学ぶ学生たちに、改めて嘯みしめてほしい一節である。